2024年11月16日(土) 13:00ごろ　国立科学博物館(上野)集合

日本のものづくり文化私論

1●博物館展示見学会
2●道具学レクチャー
3●意見交換会(懇親会)

江戸時代の文化から見る日本のモノづくり

海外で日本の「モノづくり」が紹介されるとき、かつての「Made in Japan」ではなく「KAIZEN（改善）」とか「KANBAN（かんばん）」のように、日本語をそのまま表記する記事を見るようになった。日本独自の「モノづくり（MONODZUKURI）」が、世界的に認められつつある。しかし「モノづくり」とは一体どのようなものだろうか。「わび」とか「さび」のように、日本人であれば何となく理解し、通じ合えているが、いざ説明しようとすれば、言葉に窮してしまうのではないだろうか。「もったいない」という言葉も、海外の人によって気づかされた大量生産大量消費社会の中で、忘れていた日本の古くからの文化である。実は「改善」も「かんばん」も、「もったいない」の実践といえる。無意識の文化に潜む「モノづくり」。その源流は、260余年続いた平和な江戸時代が生んだ文化だと考えている。〔講師：鈴木一義氏より〕

国立科学博物館　産業技術資料情報センターのHPより

鈴木一義氏　Kazuyoshi Suzuki　：レクチャー講師
国立科学博物館 名誉研究員

1957年新潟県生まれ。81年東京都立大学工学部機械工学科卒業。83年同大学院工学研究科材料力学専攻修士課程修了、日本NCR株式会社技術開発部勤務を経て、国立科学博物館理工学研究部、2016年より産業技術史資料情報センター長、22年定年退職。日本における科学および技術の発展状況を、江戸時代のからくり人形から、現代の自動車、航空機産業まで、幅広い分野で博物館的な実物資料の視点から実証的な見地で調査・研究。